

## 山下徳治における発生論の形成（４）

－山下の新興教育構想について－

前田 晶子〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

### Genetic approach in developmental ideas of Yamashita Tokuji (4)

MAEDA Akiko

キーワード：山下徳治、新興教育、プロレタリア科学、成城学園

#### 1 新興教育運動と山下徳治

山下徳治は、二度目のソヴィエト訪問から帰国後、直ちに『新興ロシアの教育』（1929年）を発表し、その翌年には新興教育研究所所長に就任している。この新興教育運動は短命に終わり、1933年末からの当局による強い弾圧によって、4年間で幕を閉じることになる。しかし、山下の場合、それに先んじて、32年には早くも新興教育運動から距離をとるようになったといわれている<sup>1</sup>。自らその立ち上げに関わり、初代所長を務めた彼が、なぜそのような転回を遂げたのか。

この点については、これまでの山下研究でもたびたび言及されてきた。弾圧のなかで活動が思うように進まず、生活の糧を求めて雑誌『教育』の編集部員になっていったこと、彼の研究の志向性が教育課程論や教材・教具論に傾斜したことで結果的に教育に対する社会認識を鈍らせることになったことなど、多くは山下における新興教育運動の中断とする見解が多い<sup>2</sup>。

例えば、内島は、山下の手によるものとされる新興教育研究所の「創立宣言書」を分析して、彼の認識上の問題として、次の点を指摘している。

後に彼が教材・教具の研究において極めて重要な理論的到達点をしめすのにたいして、現実の社会（山下に即しては階級社会における）のなかでの子どもの主体形成のあり方についての認識は、深化されなかったことにつながっている。<sup>3</sup>

ここには、山下の1930年代後半の『児童教育基礎理論』や『明日の学校』に代表される教育学的研究に対する一定の評価に反比例するかのよう

に、新興教育の目指す教育を通じた社会革命は十分に展開されなかったという位置づけがみてとれる。

では、そもそも山下がなぜ新興教育に関わるようになったのか。内島は、この点について、山下が訪ソを機に「社会主義的教育」にたいする否定的な見解の百八十度の転換<sup>4</sup>をみたとする一種の転向論を展開している。ソ連への両儀的態度については、本論（3）でも触れたところである。しかし、「転向」であるとすれば、山下の新興教育運動は一過性のものに過ぎないという位置づけになってしまうだろう。

他方、新興教育運動の前史を論じたもののなかでは、山下のような離脱のケースは「リベラリスト」には当然の帰結であったとするものがある。すなわち、新興教育研究所の成立をもちたいくつかの教育改革運動の潮流のうち、成城・教育問題研究会の左派（山下他）や、同じく新学校の一つであった児童の村小学校・教育の世紀社の左派（上田庄三郎他）といったリベラル派は、当初から「必ずしも革命政党の動向につながるものではなかった」<sup>5</sup>とされているのである。山下を成城学園左派とするかどうかは置くとして、新教育から新興教育への流れを内在的に整理することは重要である。また、前稿の終わりで、山下自身がシャッキーの言を引きながら、ソ連のリベラリストを何よりも評価していたことをふまえると、この見方が裏付けられるのではないかと考えられる<sup>6</sup>。

成城左派については、1929年、成城学園高等部に主として外部からの進学者によって社会科学研究会が結成されたが、それに対して小原国芳主事

は「まっこうから反対の態度をとった」<sup>7</sup>といわれる。後述するように、成城学園における高校イズム(旧制高校に見られたいわゆる白線文化)の形態は一般的な政治運動とは異なる質を有していたようである。

後者上田の場合はどうかといえば、児童の村小学校内部の左派がいくつかの流れに分かれていく中で、彼は日本最初の教員組合「啓明会」に接近し、そこから新興教育研究所に合流する。しかし、合法の組織である新興教育研究所が、非合法の日本教育労働者組合の「謙虚なる後衛的任務」に徹するようになる中で、やはり政治組織化の流れからずれてしまい、結局除名されることとなる。

このような新興教育の盛衰の背景には、蔵原惟人を中心とするプロレタリア文化運動の動向がある。小林多喜二、徳永直らに代表される『戦旗』(全日本無産者芸術連盟〔NAPF〕の機関誌)から、『文芸戦線』との対立を経て1931年の日本プロレタリア文化連盟〔KOPF〕に展開する過程では、「本来ならば、政党ないし組合がおこなうべき政治カンパニア、宣伝活動を文化団体が代行する」という特殊状況を生み出し、その結果「文化運動一般を「在来の小ブルジョア的文芸運動の内部に自らを執拗に固執するもの」として否定する傾向をうんだ」<sup>8</sup>といわれる。このような動きは教員の間にもみられ、教育実践においても、文化的側面よりも階級闘争とその相剋という政治的課題が直接中心に位置づいていったのである。

以上から、山下の新興教育運動からの「離脱」は、ある種予想された結果であったともいえる。そこで、本稿では、山下における新興教育構想の独自性を明らかにする必要があると考える。特に、彼の1930年代初期の論考を通して、この点を検討したいと考える。

これまでの研究では、新興教育研究所の初代所長として、新教・教労運動史における山下の位置を論じるものが主流であった。山下のライフヒストリー研究においても、ペスタロッチ、デューイの影響について詳しく論じられていても、それが新興教育運動とどのように関連するのかという点については、十分に明らかにされてきたとはいえない<sup>9</sup>。

しかし、前稿までに検討してきたところでは、山下のソヴィエトロシアへの接近がなによりもデューイを介してのものであったこと、また後藤新平との間に「労働大学」構想があったことなどが注目される。そこで、本稿ではこれらの具体像を山下の新興教育構想において検討していく。

ところで、山下は、1932年『日本資本主義発達史講座』第二部において、『教化史』を上梓している。なぜこの講座に彼が書くことになるのか。また、この年に新興教育運動から離れていくとされていることと、どのように整合性をもって理解すればいいか。さらに、その後の教育科学研究会の結成(1937年)と、そこに至るまでの雑誌『教育』編集部での山下の教科や教育課程を中心とした仕事との関係ではどのような解釈が可能なのか。

言い換えれば、この著作は、二度目の訪ソから新興教育運動に至る数年間のめざましい変化の時を経て、教育内容論へと深まっていく転換点をなす論考であると考えることができるのではないか。そこで、まずは次節において、1929年から1932年のあいだに発表された論文を検討し、次いで『教化史』を取り上げたい。

## 2 『プロレタリア科学』誌への執筆

新興教育研究所は、その前年に創立されたプロレタリア科学研究所の教育部会にいた山下が、同じく所員であった三木清や羽仁五郎らと共に新たに教育研究運動を進めるために設立された。1930年の夏前に、日本教育労働者組合(教労)の結成準備と歩みを共にしながら進められ、8月には所長に就任し、9月には創立総会が開かれたのである。

この間に山下が『プロレタリア科学』に発表したのは、次の5つの論考である。

- ①「シャツキー ソヴェート初等学校の理論と実際」(翻訳) 1929年12月
- ②「社会教育批判」 1930年7月
- ③「新刊批評 ヘルンレ著『プロレタリア教育の根本問題』」 1930年7月
- ④「社会時評 高校ストライキを中心に」 1930年9月
- ⑤「プロレタリア教育の本質—教育目的の批判—」 1930年10月

これらの論考の論旨は、以下の点に集約される。

### (1) ナトルプ批判と「発展」概念における歴史性の強調

山下は、ドイツ留学中に従事したマールブルク大学の新カント主義をここでは批判的に乗り越えようとする。彼は、ナトルプの社会教育学を非歴史的であるとして批判し、「人間社会の歴史的発展法則」を単純な生物進化の過程に当てはめてはならず、「社会教育は、その本質に於て、大衆的に、闘争的に、夫等の発展過程に於ける活動の渦中に於て建設さるべき」であると論じる。ここから、必然的に、「教育の政治化は絶対に必要」となり、「プロレタリアートが政治的×××××せる後に於てこそ、資本主義的組織の中に隠された教育の社会性は初めて明るみに持ち出されるであらう」と述べている<sup>10</sup>。

また、これまでの教育目的規定をめぐって取り上げられてきた「人格の自由」「人間性の発展」などは、「歴史以外の観念論的畠に育つた普遍的に考へられた人間学から持ち込まれた」「自由思想家の幻想」であるとも述べている<sup>11</sup>。ここから、山下の新興教育の立場は、ドイツ留学時代には十分になしえなかったナトルプからの（後述するように「成城からの」という意味が重なる）離陸であったと位置づけられる。その際のもてことになったのがデューイである。

### (2) デューイへの言及

山下は、ブルジョア教育批判を行う際には必ずといっていいほどデューイを引用している。彼は「個人主義的教育と抽象的観念論とのつながりは、資本主義組織下に於ては不可避的」であったとして、その点がまさにデューイの指摘するところであるとする<sup>12</sup>。

ここで、山下が人間は「社会的諸関係の総体」（『フォイエルバッハに関するテーゼ』）であると繰り返すところの、彼自身の「社会」「歴史」理解を押さえておく必要がある。なぜなら、本研究

（１）でも触れたように、1934年の「発育論争」では、山下の児童学理解に対する批判はその環境要因の欠如とされた点にあったからである<sup>13</sup>。

例えば、山下は、宗教をめぐって次のように述べている。

プロレタリアート運動が同じく資本主義発展自らの内的矛盾として出現した限り、プロレタリア運動と反宗教運動との結合は必然である。それは宗教存続についての理論的思索や信仰の問題でなく、それは実践に於ける歴史的な理解の問題である。〔中略〕かくの如く全く新しき人類の歴史が始まろうとする未来への展望に於て、宗教はその存在の根本理由を歴史的に消失する。<sup>14</sup>

このように、人間の実践の積み重ねによる内的矛盾の止揚としての発展という歴史観が示されている。しかし、これに続けて次のようにこの論考を締めくくっている。

自然の歩みと同じやうに、歴史の動きに反するものは、假令それが故意の反抗であらうと、無知の反抗であらうと同じやうに罰せられるのが、進化及び発展法則の鉄則である。<sup>15</sup>〔傍点引用者〕

この後者の引用は、微妙な差ではあるが、発育論争及びロシアでの学生との対話<sup>16</sup>で示された「アンジツヒ即自／フュールジツヒ対自」の問題に重なってくるように思われる。山下の立場は、自然と歴史を相補的に位置づけるもの<sup>17</sup>であり、この点はプロレタリア教育においても基本的に維持されたといえよう。一見、新教育からの「百八十度の転換」にみえる彼の議論であるが、いかにナトルプを批判しようとも、この人類発生論の枠組みは大きくは変更されなかったとみるべきであろう。

また、以上のことは、山下がプロレタリア教育における政治の重要性を指摘すると同時に、「プロレタリア教育は労働教育である」とするところにヒントがあるように思われる。そこで、続いて労働と学校の関係についてみてみよう。

### (3) 「労働」と「学校」の連結

シャッキーの翻訳（①）は、「十七、八校の指導学校をもつて都市及び農村教育の理論と実際とを研究してゐる」という労働学校論である。後藤

新平と実業家熊本利平の後ろ盾で果たした訪ソの目的は、前稿でも触れたように「労働大学」の建設にあった。この構想の基底には、日本における明治維新期のブルジョア革命の不徹底と封建的帝国主義への傾斜、さらに工業化と分業の進行という資本主義経済への危機感が横たわっていると考えられる。

山下の労働学校論には、学問の実際生活を基準とした再編の要求がみられる。「近代的な社会生活と没交渉な学問は就職に役立つまい」にもかかわらず、学生にはそれが詰め込まれている。その背景には、「先進資本主義諸国が数世紀間に亘って建設したブルジョア文化を〔日本は〕僅々半世紀に模倣せざるを得なかつたため日本のブルジョア文化が根を下してゐない、ほんとの学問でない」という事情が指摘されているのである<sup>18</sup>。

明治維新批判と労働を軸とした学校改革論には、マルクス主義にいうところの歴史展開を経ずに資本主義が発展している日本の場合、労働主体の形成という教育目的においてこそ即自／対自の止揚が求められたのではないと思われる。当然のことながら、ここには、マルクス主義における自然と社会を媒介するものとしての「労働」の位置づけが踏襲されている。

### 3 新興教育運動における山下の立場

次に、『新興教育』誌上の山下の論考を整理しよう。以下の7論文である。

- ①「新興教育の建設へー教育者の政治的疎外ー」  
1930年9月
- ②「ブルジョア教育学の非現実性」1930年10月
- ③「新刊批評 プレハノフ著『マルクス主義宗教論』」  
1930年10月
- ④「質疑応答欄」1930年10月
- ⑤「××と教育」1930年11月
- ⑥「社会時評 大島プロレタリア小学校の解散に直面して」1930年11月
- ⑦「教育界の経済的破綻」1930年12月

#### (1) 教育者の政治的疎外への警鐘

『新興教育』誌における山下の論考は、より運

動論的である。山下は、「修養とか人格とか道徳とか言ふ美しい、併し幻想にしか過ぎない言辞」しか与えられてこなかった教育者は、その政治的無知・政治的疎外を見抜き、またそれが「人間的自己疎外」であったことを自覚する必要がある、という。そして、「大衆の人間の解放の〔政治的〕実践」「新興教育建設への過渡期的任務は資本主義組織の中に隠された教育の社会性を明るみに出すための政治的闘争である」という新興教育運動の目的を明確に提示して呼びかけたのである<sup>19</sup>。

また、革命後のロシアにおいても、教員組織が保守的な立場を取るようになった点を指摘して、「吾々は吾々の運命を克服しなければならない。現代の社会科学はそれへの×器を吾々に供してくれる。」として、教員社会の自己変革を促していた<sup>20</sup>。

#### (2) 社会科学の徹底と、自然科学との並行関係

さきにも触れたように、山下における発生論は必ずしも自然法則から断絶した社会科学のみを純化させるものではなかった。両者を区別しながらも、その関係を「労働と教育」を通して深化させようとしていた。

自然法則を根拠として自然科学が成立したやうに、社会の歴史的発展の客観的法則を根拠として、社会科学が発展したのである。故に吾々は、自然の歴史と、社会の歴史の中に生活してゐると言ふのである。而かもその歴史は階級闘争の歴史である。然るに、観念論的教育学はかゝる自然の歴史と社会の歴史との外に、「人間性」とか「人格」とかの概念を持ち込〔む〕<sup>21</sup>

いくつかの論考で繰り返されるのは、社会の歴史的発展の法則を自然法則とは異なるものであることを一応はみとめる「社会民主主義者」に対して、観念論者として厳しくこれを退け、唯物弁証法において実践上に足場において展開されなければならないと強調している<sup>22</sup>。

しかし、ここでの山下の立場は、明確であるとはいえない。ブルジョアジー批判の際には、「ブルジョアにとつて社会は、全く自然必然的であ

る」「ブルジョアジーは人間の社会が、どんな発展法則で動いてゐるかを少しも自覚してゐない」<sup>23</sup>として、社会科学の重要性を強調する。しかし、他方では、自然法則の教育における独自の位置づけについては、歯切れはよくないものの決して否定するわけでもない、という並行関係がみられるのである。

さて、『プロレタリア科学』と『新興教育』における山下の論考の決定的な相異は、後者にデューイが登場しない点である。そして、デューイに対する批判ともとれる次のような指摘を行っている。

人は又ブルジョア民本主義の中に育つたアメリカの実用主義とソヴェートデモクラシーの中に育つ「社会に有用なる労働」とを混同してはならない。<sup>24</sup>

2でも触れたように、『プロレタリア科学』では、デューイに言及しない論考の方が珍しかった。この対称性は、運動体の微妙な差として理解されよう。おそらく、1930年代半ばに山下が雑誌『教育』の編集に携わるようになる中で、再びデューイと、上にみた自然法則と社会法則の関係が改めて問われることになると思われる<sup>25</sup>。おそらく、歴史的発展の段階性的の問題として再検討されることとなろうことを示唆しておきたい。しかし、『新興教育』誌上では、この点が未消化のまま残ったものと考えられよう。

#### 4 『教化史』(1932年)へ

2と3で検討した諸論考と同時に発表されたのが、『新興ロシアの教育』（鉄塔書院、1929年12月）と『ソヴェートロシア印象記』（デューイ著／山下徳治訳、自由社、1930年10月）の2著である。後者の序をみると、彼の二度目の訪ソは、デューイのロシア行きを知って計画したものであったことが記されている。しかし、残念ながら、山下がモスクワに着いたときには、デューイはすでに次の土地に出発していた。

印象記の序では、デューイの『学校と社会』はマルクスの知識なしには正当に理解しえないだろうとし、また彼こそが「政治的革命的有つ文化史

的意義を明瞭ならしめた」とされている。しかし、他方では、「典型的ブルジョア民主々義的のアメリカ」人である彼がどこまで叙述できたのかは批判的検討が必要であるとしている。特に、革命の成果としての「文化革命」（とりわけ学校や校外教育組織、教授科目など教育分野）に対する高い評価とは裏腹に、「経済的、政治的革命に対する反対」が散見され、デューイの「個人的偏見即ち人間の直観以上のものでなく、それを人間の歴史的社会的運動として理解してゐない」というのである。

このように、一方ではアメリカ産プラグマティズムとソヴェートロシアの新興教育の間を渡りつつ、日本の、特に恐慌を経ての社会不安において、革命的運動が一種の問題を孕んでいることにも言及している。

資本主義の高度の発達と、極度の国家権力の行使とは、無産者解放運動の進展に照応する。併しそれらは又学校の企業化と警察国家化に反映した。<sup>26</sup>

そんな中で、山下は、冒頭にも触れた講座『日本資本主義発達史』において、唯一教育が取り上げられた巻の執筆を担当した。

『教化史』は、明治以降の近代教育の、主に制度史を俯瞰したものである。第一期：明治維新から教育令期、第二期：学校令（1886年）から小学校令の改正（1907年頃まで）、第三期：新大学令（1918年以降）の三区区分を取っている。なぜこのような通史の執筆を担当したのだろうか。

冒頭には、「教化史の政治的意義即ち教化政策史の分析的叙述を中心に、教育制度及び教育思想の変遷を跡づけ、「宗教問題の補足的叙述」も行うとされている<sup>27</sup>。そして、ナトルブにみられるような経済、教育、文化の「交互作用」を批判し、マルクスに依拠し、階層性（経済規定性）と歴史の発展段階性に基づいて、文化史の中核に位置づく教化史を論ずることが目指されている。

従って、中身の叙述の具体例を挙げれば、後進国として性急に近代化を求められた日本資本主義の不徹底や、封建制の残存する中で都市化・工業化のしわ寄せが資本主義の発達を抑制したことな

どを押さえつつ、日本の学校制度がいかに封建主義社会を引きずらざるを得なかったか、自由民権運動の影響の弱さ、教員の政治的疎外、プロレタリア教育運動の勃興、高等教育における学生問題、最後に「未完成の教育科学」で締めくくられている。

結語では、大正自由主義教育の動きがあったものの、制度的成果を上げることができずに終わったことに触れつつ、次のような指摘がある。

児童に対する注意の成長は科学的でなく、そのため児童学の研究は著しく未発達である。そのことは児童教育の自然生長性を無視して、教授内容とその方法は高圧的となり、個性の獨創性、個性の自由なる発展は拒まれてゐる。教育学は中途半端で、〔中略〕明日の社会、明日の教育への展望を有つてゐない。<sup>28</sup>

ここに、山下が新興教育を通して教育の歴史観を掘みながら、教育制度や社会運動を理論的に支えるための「児童学」への志向性を垣間見ることができる。その意味で、『教化史』が新興教育から『教材と児童学研究』に渡る道筋を付けたとみることができよう。

ところで、『教化史』は、6年後の1938年に英語版「Education in Japan」<sup>29</sup>として再版されている。時期区分などに変更はないが、『教化史』において重要であったブルジョア教育の問題点やプロレタリア教育運動の可能性についてはほとんど割愛され、いわば民衆生活に即して教育制度をどのように拡大していったかの歴史叙述となっている。このことをどうみるかについては、その後の発育論争、教育科学運動、そして戦後にまで連なる彼の「技術」論の検討を通して行う必要がある。

## 5 成城学園時代の総括

さて、山下は、このようにして新興教育から距離を取るようになると同時に、冒頭でも触れたように、教育内容論を深めるようになる。海老原治善は次のように述べている。

この頃の山下は、社会現象としての教育、あるいは

は社会発展・変革における教育の役割といった課題を意識的には避け、教科・教材・教具・教授法の問題に焦点をあわせて、それを、唯物論の立場から追求していったといえる。<sup>30</sup>

この過程を海老原は、山下の「転向」であるという指摘を行っている。しかし、これまでにみたように、新教育の社会的足場を求めてソヴィエト教育から新興教育と渡り、デューイの位置づけや人間発達の即自/対自問題を積み残したまま、1930年代半ばを迎えていた、という状況であったとひとまずは総括できよう。

ここに、1936年に出された成城学園史<sup>31</sup>がある。山下は、このとき学園を去って8年を数えていたが、沢柳政太郎校長についての論考を寄せている。本稿の最後に、この冊子を素材として、創立20周年を迎えようとする学園の、また山下自身の、新教育に対する総括を検討したい。

まず、この冊子は、高等科発足10年を記念して作られたもので、前半はその高等科史に裂かれている。1でみたように、成城学園も高校紛擾の影響を受けて、学生の左翼的活動が起こったことが記されている。特に、「昭和四年春」は高等科に多数の外部からの入学者による「高校イズム」運動が展開された年であり、弁論大会や教室での遊説、校友会委員会選挙法の改革運動、そして自治寮の建設運動などが行われた<sup>32</sup>。

これは、平和な自由主義的雰囲気をもつ「成城イズム」との対立を生んで、ある意味で学園に活気をもたらしたとされている。ちなみに、主事の「小原 [国芳] 先生によびつけられて、君たちの気持は成城にはふさはしくないといつて、頭からしかられた。」というところから、小原が左翼運動に否定的だったことが伺える<sup>33</sup>。

しかし、その対立から生まれたものは、成城において独自の高校文化のかたちをもたらしたとされるところが興味深い。例えば、その年に作られた「社会科学研究会」は、「一般社会上の左翼とは多少異なり、学校に於ては彼等の表面的な闘争は自治と自由との獲得といふごとき、徹底した自由主義の程口の形態をとるのであって、この点左翼以外の人々の参加が非常に可能なのであった」

というのである<sup>34</sup>。1931年には高等科生徒の4分の1を包含し、非合法ニュース「新興成城」を発行するまでになった社会科学研究会ではあったが、その中でも「成城文化の特質」が息づいて、やがて衰退していくとされているのである<sup>35</sup>。

この学園史では、以上のような性格を象徴的に次のように表現している。

底辺に地上的を置きそのうへに全人的が横たはり  
合理的自由主義をその頂点とするところの一つのピラミッド！<sup>36</sup> [傍点原文通り]

このように、小原国芳の全人教育の理想主義が、1930年代の左翼的な高校文化と重なりながら「成城文化」を形成したというのが、この学園史の1936年時点の総括である。

さて、山下の沢柳評価<sup>37</sup>に移ろう。山下は、沢柳の逝去の3ヶ月後に成城を去り、自由学園から新興教育研究所を経て雑誌『教育』（岩波発行）の任に就いていた。ここでは、デューイと沢柳を重ね、両者ともに徹底したデモクラシーの思想に貫かれていると力説し、逆に成城学園を批判的に検証している。

最も決定的な要因は教師達がデモクラシーの本質的理解を欠いてゐたため、教育改造の社会的、政策的意義と任務とを十分に発揮し得なかつたことである。ここでは個人的研究や個人的興味に止まつてゐることが出来ず、未来社会の成員養成上必要にして十分なる社会的基礎教育としての希望と計画とに於いて、全国の教育改造と常に密接に連関した成城教育の建設が実験的に遂行さるべきであつた。<sup>38</sup>

このような成城に対する山下の批判は、同郷の小原国芳主事にもっとも厳しく向けられた。とりわけ、沢柳の目指した「教育方法の新しい建設」を小原が遂行しえなかつた点にあるとして、ルソーに重ねつつその「個性の無限なる発展の理想」の弱点を批判するのである。

成城の教育事業に於ける経費、学級数、一学級の児童数、カリキュラムの構成法、教材の選択と配

列、教育方法、児童の訓育等はすべて、当時の国情に即して、そこから一段の努力と組織の改編によつて容易に達し得られる程度のものであつて、ひとりの富者の子弟の教育を、その親達の利己的要求に満足を与へるやうなものでもなく、また空中楼阁的な教育の理想を夢想した要素は微塵も、[沢柳]博士のプログラムの中には発見されなかつた。そして何よりも重要な思想は、日々の教育活動を教育研究の対象とする実験学校であつたといふことである。<sup>39</sup> [傍点原文通り]

沢柳博士の冷静なる科学的研究の態度、小原主事の熱烈なる個性解放の教育者の精神の調和、統一がここにまた一つの重大なる課題を成城教育に投げかけてゐる。<sup>40</sup>

このような痛烈な小原批判は、おそらく自身にも向けられるものだったのであろう。なによりも、沢柳教育学の持っていた教育方法や教育課程に対する実験的志向性が強調されているところが注目される。この点こそ、山下が成城時代を批判的に総括し、1930年代後半の自身の研究課題として志向したところだったのであろうか。

ここにみられる沢柳校長に対する評価は、戦後に至るまでぶれることはなかつたといえるものである<sup>41</sup>。後に山下は次のように述べている。

博士の観念の中には、新教育の育成は、先ず学校の職員組織の民主化から出発すべきであるという意味が含まれていた。<sup>42</sup>

ドイツ留学、訪ソから新興教育研究所を経て山下が成城を再評価する際の中核が見えてくる。民主的な学校づくりであり、その際の手がかりとなつたのがデューイであつたことも看取されよう。

その後、山下は、発育論争を経て技術論へ本格的に展開する。その成果はやがて一連のデューイ研究と『明日の学校』に示されることとなる。その際に留意したいのは、山下の日本の「民衆」把握であると考えている。

- <sup>1</sup> 海老原治善「解説 山下徳治とその教育学」『明日の学校』明治図書出版、1973年、p. 252。
- <sup>2</sup> 前掲「解説 山下徳治とその教育学」p. 256。ここでは山下を転向者と位置づけている。
- <sup>3</sup> 内島貞雄「山下徳治の子ども認識と教育研究」『教育運動研究』1976年7月、p. 70。
- <sup>4</sup> 前掲「山下徳治の子ども認識と教育研究」p. 69。
- <sup>5</sup> 中内敏夫「第一章 大衆団体の急進化と『新教育』各派の分裂」黒滝チカラ・伊藤忠彦編『日本教育運動史 第二巻 昭和初期の教育運動』三一書房、1960年、pp. 34-35。
- <sup>6</sup> 山下は、ソ連で会った教育学者シャッキーの言葉を借りて「殆どコンムニストのいなかった教員層を進歩的なものに支えてきた人々はすべて自由主義者であった」「リベラリストがいちばん強かった」と述べて、自身の立場を表明している（森徳治「新興教育研究所創立当時の回想」前掲『日本教育運動史 第二巻 昭和初期の教育運動』p. 110）。
- <sup>7</sup> 前掲「第一章 大衆団体の急進化と『新教育』各派の分裂」p. 23。
- <sup>8</sup> 前掲「第一章 大衆団体の急進化と『新教育』各派の分裂」p. 25。
- <sup>9</sup> 井野川潔「山下徳治と新興教育」『近代日本の教育を育てた人びと 下』、東洋館出版社、1965年。
- <sup>10</sup> 山下徳治「社会教育批判」『プロレタリア科学』第2年第7号、1930年7月、pp. 96-98。
- <sup>11</sup> 山下徳治「プロレタリア教育の本質－教育目的の批判－」『プロレタリア科学』第2年第10号、1930年10月、p. 74。
- <sup>12</sup> 前掲「プロレタリア教育の本質－教育目的の批判－」p. 72。
- <sup>13</sup> 前田晶子「山下徳治における発生論の形成（1）」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第20巻、2010年。
- <sup>14</sup> 前掲「プロレタリア教育の本質－教育目的の批判－」p. 81。
- <sup>15</sup> 前掲「プロレタリア教育の本質－教育目的の批判－」p. 81。
- <sup>16</sup> 山下徳治「海外通信 若きロシアとその道徳生活」『倫理研究』1929年6月号。
- <sup>17</sup> 前田晶子「山下徳治における発生論の形成（3）」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第22巻、2012年、p. 140、143。
- <sup>18</sup> 山下徳治「社会時評 高校ストライキを中心に」『プロレタリア科学』第2年第9号1930年9月、pp. 49-51。
- <sup>19</sup> 山下徳治「新興教育の建設へ－教育者の政治的疎外－」『新興教育』創刊号、1930年9月、pp. 10-15。
- <sup>20</sup> 山下徳治「××と教育」『新興教育』第1巻第3号、1930年11月、p. 6。
- <sup>21</sup> 山下徳治「ブルジョア教育学の非現実性」『新興教育』第1巻第2号、1930年10月、p. 12。
- <sup>22</sup> 前掲「ブルジョア教育学の非現実性」p. 16。
- <sup>23</sup> 前掲「××と教育」p. 4。
- <sup>24</sup> 前掲「××と教育」p. 9。
- <sup>25</sup> 例えば、山下徳治「新教育学説の種々相」（『理想』1933年11月号）にその端緒をみることができる。
- <sup>26</sup> 山下徳治「教育界の経済的破綻」『新興教育』第1巻第4号、1930年12月、p. 34。「企業化」とは、学校騒動が月謝の削減を求める形で進んだこと、警察化は学校内における紛擾対応の自衛団が作られていったことに象徴されるという。
- <sup>27</sup> 山下徳治『教化史』『日本資本主義発達史講座』第二部 資本主義発達史、1932年、p. 3。
- <sup>28</sup> 前掲『教化史』pp. 40-41。
- <sup>29</sup> Tokuji Yamashita, Education in Japan, The Foreign Affairs Association of Japan, 1938. ここでの山下の肩書きは、Formerly Professor At The Seijo Koto Gakko となっている。
- <sup>30</sup> 前掲「解説 山下徳治とその教育学」、p. 254。
- <sup>31</sup> 成城高等学校同窓会『成城文化史』1936年。
- <sup>32</sup> 前掲『成城文化史』p. 16。
- <sup>33</sup> 前掲『成城文化史』p. 58。
- <sup>34</sup> 前掲『成城文化史』p. 19。
- <sup>35</sup> 前掲『成城文化史』p. 25。
- <sup>36</sup> 前掲『成城文化史』p. 31。
- <sup>37</sup> 山下徳治「我が国における成城教育の意義」前掲『成城文化史』。
- <sup>38</sup> 前掲「我が国における成城教育の意義」p. 175。
- <sup>39</sup> 前掲「我が国における成城教育の意義」p. 174。
- <sup>40</sup> 前掲「我が国における成城教育の意義」p. 179。
- <sup>41</sup> 森徳治「成城小学校の自由教育」『日本教育運動史 第一巻 明治・大正期の教育運動』三一書房、1960年。
- <sup>42</sup> 森徳治「教育発達史から見た成城教育」『成城教育』1957年、p. 31。